



令和初!

梅毒、夏季の感染症について

本号ではまず**梅毒**について記述します。梅毒は、梅毒トレポネーマと呼ばれる螺旋状のグラム陰性菌(スピロヘータ)を病原とする感染症で、主に性行為や疑似性行為によって感染する**代表的な性感染症**です。16世紀以降、我が国も含めて世界中で蔓延していましたが、フレミングによるペニシリンの発見以降患者発生数は激減していきましたが、近年特に日本での**患者発生数は急増**してきています。

梅毒の臨床的特徴を記載します。『①**早期顕症梅毒第Ⅰ期**: 感染後3~6週間の潜伏期間を経て、感染局所に初期硬結、硬性下疳(無痛性潰瘍)を形成、無治療でも数週間で軽快、②**早期顕症梅毒第Ⅱ期**: 第Ⅰ期症状消失後、4~10週間の潜伏期を経てパラ疹と呼ばれる全身性の発疹、粘膜疹、扁平コンジローマ、梅毒性脱毛等の症状が出現。無治療でも数週間~数か月で軽快、③**晩期顕症梅毒**: 無治療の約1/3が、数年~数十年の潜伏梅毒の期間を経て晩期症状を呈する。非特異的肉芽腫病変(ゴム種)が皮膚、骨、内臓等に発生し、心血管梅毒や進行性麻痺、脊髄癆、痴呆等の神経梅毒に進展していく。』このように、梅毒は病期の大半が症状のない潜伏期であり、第Ⅰ期と第Ⅱ期の間や第Ⅱ期の症状消失後の状態を『**潜伏梅毒**』と呼んでいます。また、**妊婦が梅毒に感染している場合、胎盤や産道を通じて胎児または出生児に伝播し、『先天梅毒』となります。**

我が国の梅毒の年間患者数は、2010年は621名でしたが、その後は年々増加がみられ、2017年は5,770名、2018年は6,923名となりました(図)。都道府県別では、東京都と大阪府からの報告数が突出しており、2017年の大阪府の報告数は845名、2018年は1,191名でした。特に20歳代を中心とした若年女性の増加が顕著であり、これまで梅毒に関する情報に殆ど接してこなかった若年齢者への教育・啓発が急務となっています。

その他、5月は夏期に流行する感染症の罹患者数が増加する時期ですが、特に例年の同時期と比べると既に報告数が増えている**伝染性紅斑**と**RSウイルス**感染症、これから患者数が急増して昨年よりも大幅な患者数の増加が予想される**手足口病**の発生動向には注意が必要です。

(感染管理室 安井 良則)

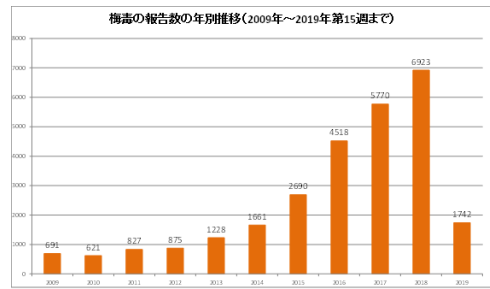


図. 日本国内の梅毒の報告数の年次別推移(国立感染症研究所感染症週報(IDWR) <https://www.niid.go.jp/niid/ja/idwr.html> のデータを引用して作成; 2019年は第15週まで)



抗菌薬(抗生物質)を大事に使おう!!

2019年4月20日に、なかつ病院市民講座において「**抗菌薬(抗生物質)を大事に使おう~かぜに抗菌薬は効きません!~**」というテーマで講演を行いました。

抗菌薬(抗生物質)が効かなくなる、細菌が薬剤に対して抵抗力を持つように変化する「**薬剤耐性**」は、日本を含め世界で早急に取り組まなければならない問題です。抗菌薬適正使用は、医療従事者のみならず一般市民の方々にも広く知ってもらわなければいけません。薬剤耐性対策として、今ある抗菌薬を大切に未来に残すために、私たちにできることをお伝えしました。

【当日の内容】

- ☆ 抗菌薬が効かない**薬剤耐性(AMR)**を持つ細菌が世界中で増えていることをご存知ですか?
- ☆ 風邪を引いたからと抗菌薬をもらいに病院に行っていないですか?
- ☆ 風邪などウイルスによる感染症に抗菌薬は効きません!
- ☆ 薬剤耐性とは? どうして起こってしまうの?
- ☆ 薬剤耐性の拡大を防ぐためにも、抗菌薬を服用する際は、医師や薬剤師の指示を守って、必要な場合に、適切な量を適切な期間、服用しましょう。
- ☆ 日々手洗いを心がけ、必要なワクチンはきちんと接種し、予防できる感染症にかからないように努めましょう。



参加された方からは「抗菌薬の飲み方は気をつけないといけないことがわかりました。」「家族にも早速伝えようと思います。家に帰ったら余っている薬を確認したいと思います。」といった感想を頂きました。当院の抗菌薬適正使用支援チーム(AST)は、4年目を迎えました。病院・診療所・保険薬局や患者と一緒に薬剤耐性に向けた取り組みが出来るよう活動していきます。(AST 三木 芳晃)

